

「哲学的哲学史の創始者」としてのカント

小原優吉（東京大学）

E. フォルスターは、ヘーゲルの歴史論を解釈する際に「歴史主義」という用語の意味を「法則と目的に関する歴史主義」と「知性に関する歴史主義」とに区分し、カントが前者を採用しつつ後者を採用していないと評している。ここでは、カントの啓蒙主義的な歴史観が念頭に置かれながら、カントは人類の歴史が目的論的な過程を経るとしつつも、「人間の思考については歴史を通じて大きな変化を経験しないと考えている」とされているのである(E. Forster[1998] *Hegel's Idea of A Phenomenology of Spirit*)。こうしたカント評価に面して、例えば『純粹理性批判』の末尾に付された「純粹理性の歴史」を想起するならば、われわれは疑問を抱く。D. ヘンリッヒによればむしろカントは「哲学的哲学史の創始者」であり、人間理性はその本性にしたがって形而上学を求め、そして誤った独断的な形而上学を潜り抜けついには批判へと至ることになることを示している(D. Henrich [2002] *Between Kant and Hegel*)。

さて、とはいえヘンリッヒはこうした「哲学史的哲学史の創始者」としてのカントという描像を示唆するにとどめている。そこで本発表では、ヘンリッヒのこうした見立てを『純粹理性批判』から確かめ、形而上学の歴史がどのような航路を辿るかということについてのカントの見解を明確化することとしたい。

行論は以下である。第二節では「超越論的弁証論」の序論と第一篇を手がかりに、カントによる「理念」の「主観的導出」、すなわちなぜ人間は不可避免的に理念を産出することになるのかについての説明を確認する。カントによれば、「形而上学」は学としてではないにせよ、「自然素質」としてあらゆる時代に存在している。形而上学は人間にとって可能な経験の領域を越え出ており、したがってそれは人間理性によって解答されることができないにも関わらず、理性はおのれ自身の欲求に駆り立てられて経験を超越した理念を産出するに至るのである。ここではカントによる理性の能力についての議論を参照しつつ、理性がどのような機制に基づいてあらゆる特殊な認識を包摂する無条件的な「理性統一」を要求することになるのかを明らかにする。これによって明らかとなるのは、いったいいかにして形而上学が、「学」として主張されるに先立って、人間理性によって不可避免的に要求され

ることになるのかということである。

第三節では、弁証論第二篇の各論を扱いながら、いったいいかなる仕方で人間理性は形而上学に関する客観的な見かけを装った主張を行うに至るのか、またそれによって形而上学をめぐる人間理性がどのような事態に陥るのか、ということについてのカントの見解を明らかにする。カントによれば、上述のような理念の主観的な要求に加えて、人間理性はある不可避免的な仮象に基づいて理念の客観的実在性を主張するに至る。本節では「誤謬推理」を例として、この仮象の不可避免性がカント自身の提示する超越論的観念論の無理解に基づくものであることを確かめる。

さて、加えて第三節では次のことにも注目する。それはすなわち、「アンチノミー論」においてカントは、「世界」という理念に関しては他の学では見られないある「新しい現象」が見られると述べているということである。この現象とは理性の「自己矛盾」である。すなわちここでは、理性がある形而上学的主張を客観的なものとして誤って為すのみならず、二つの対立する形而上学的主張を等しく客観性を持つものとして提示し、それによって理性は自身との「抗争」に陥る。そこで本節ではアンチノミー論における「理性の関心」についての記述に着目しつつ、抗争という事態が人間理性のいかなる特性に基づいて生じることになるのかを示す。

最後に第四節では、弁証論や方法論において散見される、〈アンチノミーが機縁となることで、人間理性は批判哲学へと至る〉というカントの考えを取り上げる。それを通じて、以上の議論を総括しながら、カントが人間理性の本性に訴える仕方で、形而上学が辿る歴史について積極的な見解を有していること、また自身の批判をそうした形而上学の歴史の先端に位置付けていることを示すとともに、カントが描く形而上学の歴史の概略を再構成する。

さて、以上のように、本発表ではヘンリッヒによる「哲学的哲学史の創始者」としてのカントという評価を確かめるために、それに関わる限りで弁証論以降のカントの長い議論を再構成することを試みるものである。発表時間中には扱いきれない論点が多々あるかと思われるため、この点諸賢のお力を借りたい。